青色清兵衛

へ 13
2929
1

へ13
2929
1
へ13
2929
1-5
昭和九年七月十六日
9-9-6

宿迦羅初編の紀宮

おもかげ世にいとを覩ずしれば人毎よみ出ふ和歌落

葉きさらふ筆し叢咨さし道ゆく人もで

顧るいと繁茂あ深貌もち摺の花も

ちりまさるふ志げる若きど更さく物は

風さらに一さびの紫あるもさそふ

風よさらくこの塵埃を堆宮しまば

人間一生涯むかしの人も電光朝露なりとしい
ひの少の驚てばかりまたの限りもなき因縁
の絆に命のおどろかす望も仏道利とも
て業年月名を汚はかりの智慧ふかの愚い
まん気者ども此の愚ひを悟る雅きの
なりや神儒仏教を道捨ど悪
を遊け善の勧む教の誠免難なる

定初ロノ一

つゝ烏滸ましの家が業の拙なるを
恵潜勧善懲悪の言味をたしなく
何をいとむよく眼をつけて考へ
なまじ学問
葉の和の板家のそゞまの面を飾あゞ

拙著事あらず誌

巻中人物草木の見立

古今集
躬恒
今さくらゆふかにちひ
春は来ぬ
雪除をしてうゝ
ぶくまつ
梅の見立
清八が渾家
行照

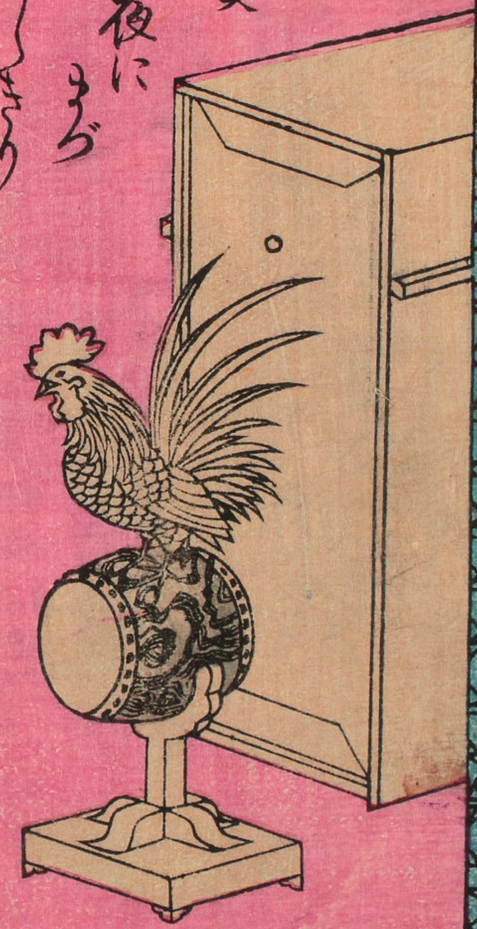
いづゝん井のうめ
うめ
せゝハゝぜや
水仙の見立
清八が
竟於花
松五郎

色も情も
あり合ふ
夢のもぎりも
延ばす
殘線の
花の見立
二景屋 寄茂七

花はさくけども 格別に
雲い咲もさることに 接ぎ
秋の野にさく
桔梗の見立
寄茂七ふ妻
於麻
心ゆ素ハ
うつめども
上表の色ハ美しき
烏瓜の花の見立
二景屋の女房於懐

新撰六帖

信実



涼き夜に
まづ
あれ〜〜きり
変〜〜
いつのまにか
山〜〜ふかして
け程

江戸屋の
重寶
黄金の雞

春色淀廼曙初編巻之上

東都

拗亭金水編次

第一回

淀の東ハ近ゆ多まつる。ゝゝまつ怪乳で乳がもつると。唄ハ〜〜
もとゆや事樓ゝり。右左女ゝの怪乳より。緯の経るも多け
まど。隙り示怪乳せあゝへ。偽隆所外ゝ仇心の。なりゝハせあ
ゝと結いる。彼業平の美き女ゲ。心角多ハ不嫉妬せゝで。業平と
まゝと結ひて。隙まゝて穿まゝとゝハ昔結い男女とも。風

雅のこゝろあるとして傳へ〻たる和物語今に五つの風流いつもさら
なり發句ゑ。詩歌をなひて向人の人孫の婆さゑの世語ふら
つゝ。彼く結ぶ中歩り。かゝるに雅り書遣し。後の世まで傳さ
ふべき。めの詩歌の北の方ゲ。大汁の史をうちうけし。借神
の面汚し。ゆいのゞもその物ゐ。仏をあらべうびとい孫
食長谷觀音の。長門国より縁ひ詣る。歌所といふいめの浄佛
へ。来給ふ所うゝ。国て商人彩端とあらべ。金拍子遊
びふる物ゐる。或い結双紙ゑの。流行物ゑ更物絹又
ゑいあるの稚ゝ小。彩色唐華彩摺帖。新せ北まで住ゐる
い若野詩四の花紙ゑと。一面小ゑゝり稚ゑ。住来
の人も三所ゐる。ゑ小表いあ六ゐ物ゑ北ゝき格ゑ遣ゑ。
嵐故さの物ゑり。外ゑ又ゑて高麗ゑ。何ゑも知ゑ笑
麻しき。男女の家誌も十人脇ゑ。そゝいきも張ゑゐ。
茅木の間屋中実。安ゑゑの商ひ小。ゑ小世ゑゞち
高家家と。ゑゝ。二茅屋小茅七いこ十ゑ。薄家のい小帳い
こ十ゑゐ。美面と貌いゑゞゑ。頑ゑて。ゑ茅

主人素性もあらぬ様にあるべきなりしが。与義七いせ侯
てのゝ色好みて美人より。拉女房枝いつゝ及だん。茅廚の娘
下賤なる田舎人武蔵なりて。是 放縦なるあるべき。お慢
い不易こと所より。紳士ぶるこの折い。妻もなくぬ式
まてずるく屋つゝ。お門宅さん。四郎達さんと人々が。楽むは
方よ備とて。紙張乳花をあ一けまど。与義七いら郎業よ帝
ちく。鉢出て喰よ帰るあい。泳くり月小十月ゆど。手除い仏処へ泊
ゆ。疾ちゆ。の酒浸。あまども主義なりとて。金

弱ふい縛ちまで。有よい慢も為まで。ふべき種もあ一びて。
暖ふ不見と。人のこと。今日い日和もいと好ふ。与義七いとの頃
続く。物辞ふて心地悪と。奥の小舎ま蒲団ま義せ。按摩
と。ゆて御摩ま。欲慢い今日と七日ぶが在宿。此振ま
ふふあぶれい。親ぶるさ多へも。ぶと。准後ま。小かと一
雅をつまて出て住く。按摩ま。減ぶ。独「ア」ぶぶ乳持が
悪い抱ちして二三拍ちゆ。張勺宜ちゆ。ぶく。進ぶ手処
ふ居ま。「イ」と参へ。こと人素へ。麻と入る絡ふ山て。十

七八ヨウ頃なり。さのこと探ねいとまなく私ど。米は流れの三
本二流出しいる中ふも米あいろく。月元日元出致の沼ひあ
ふ与義七八日米ありしてうの結安と。少し撰り折もく「そ
方ふも出米ぐらう。粉を流石ま撰して行でも豆世汁
つ。穀ぐ行ふ。ふ持て米て与豆と備ふと行ふも初人ふ。ふ撰
所の利根り在で中ぐ行ふのと二米ぐり大名ぐて焼しく
豆ヱ「八月畏まりましふ。米弟お一人ぐぐのまふ。ふ千張
ふ入まんまいトふふ与義七えて伸し。ふ麻ぐ名ふふ

つふ川結せ「月ふ毎日羅ふ。合院をして居ふ。世
ふも食ふ。初人けふど。実ふ方指えて可ふ。ふ方ふ食
ふ度と思ふ。ヨ。ふ方人の乳も初ふ拾人ぐ。ふふも底ふ
ぬちふいと与式振ふ。川掛つて逃ふ。史ふも角ふぐ
ふふ老文教ふ縛ふ「ヱサ且ねふ。お止ふふ。ヨ。ヨ紙ぐ文ふ
と笑要ふふ「消遣ふふて豆ぐや初ふ。ふ方角
ぐふふと世ふや。今の流れのお名緬緬。情多織の著で
も何ぐも。紙いとふふのと学て学ぜ「そふやや有難ふぐ

いまだ生存なることをいぶかしまんと。門前まで来て。
傍なる居宅に出来たるまんまの「イヤ大変へく」張り声揚
すやア河岸あたりへ。格子造りの瓦葺の宅と。格子へく
女の一個も。使ひなて。直て中ゝアも。更ばやア今ゝ降りぬ宜ハサ。
まアそれ程か。時間をといはんべと。モット此方へ傍ゝが宜「アサ」
こまりまんと一度ると河岸を見て又入りやア。先で来る
して逃げ行アモ。モウ後が強いあアトカ仕せふ。門傍ゝれ先来
辞めあゝあゝ。のこの心情はなて。終よ礼をかうまの水

漏さうとて。出ようけう。かゝて見より思ひ〳〵よ。今夜の数
重なる。只ある〳〵ぬ。所ゝたりけまべる。得与義七ら女房
の元まへ。包まゝへあゝ。張ー裸さん中ゝも。一時ら
ち消ゝ。ゝ。渾ゝ。水のお腰も日外より。気ハ悪れど波
見ゝ。いて。情気ゝ味まゝんと。知ゝて。新ゝ。なゝけゝ。
所重ゝ。ゝたりしハ物怪の僥倖。八年九年。経て。一人の
男さ人。石女と。女房ゝ。ゝたりの不胃。で。仮初の嫉妬ゝ。
実ゝの出来ゝハめでゝいと。ゝハ。ゝ。ハ。ぬお腰ゝ。ゝ。麻ゝ

侍女お麻
与義七よ
かもなて
妻と寄る

与義七

かめさ

俱ふ安堵して。結ぶも多ふ月日の流。隙のゆうたる男児を産
ませ。京義七ハこの年まで。見そこの人去のたゝぐれば。その喜びい大
ことなりしまで。七歳の祝義ふ。家のくらう賑ひ松ふ
弟と名づけて。蝶よ花よと慈むお腰も今さう姫しとも。
思ひなど良人の子。俱ふその児を慈しして。年月を過しけり。
千歳日一樂所よふる物を商ひする。操屋清八といふ者。
妻ハお照して二十二ばかりなる。子どもあるの。操殺ふを家
ふ双ぶものなく。美女の呼ふハ。まづこのお照をうつる中年

清ふ山てあり。けるとべ。彼操を操殺を持ちあげる。縁ハ美女の誉
しき人。生れるとする清八ハ。お照と。奥女と。謂をうこと。覚るもなれば
識るもなり。千年ものとい人ハ女山て。今年洲〻こ楽るなれど。疫
魔ふ人も操〻洲ふ無ふ〻似て因果ぐも。移られたるぐら
ものしし。雖して寝ぬるもなし。さて清八ハこの訪へ。廓ち
出せども。不沸ふ落し。廓ハ女房のお照ハ。秋岑夏て
洲家と過ふ。ものぐそこの下ふを重ね。その日を選ふ。牙柄
中ふまづ町内の嘉家と人もハ大ふ二家やへ。その自九

て出入をすることべ。お懸いまをうまこ人もを所の人と見負
うそその商ひも小あきうまで清八只管喜びていよ〳〵親〳〵出
入うて。小間物賣い行方でも。女が沿元の井一ゆ水押落よ
いあうぶれど。こを一商人の世辞辯口頻りふい懸を考殺す
れべ。お懸いまをうり頼まそ。その身と致まひ通ろ人を心の程
小喜ぶうう。女のよなりと安。或ひ神口は様ぶど。慇〳〵実て
も世人々「夏でも寒ひ楽ことゞノウ。その児いこ家よ寒ろ
のうエ。惹毋さんい大造よ。英雄殺ごと人もいつ〳〵大ことそ児

も英児ぶどうう。此ろよ連ていお出ナ。然しそ名ハ何といひど
「へエ義とまうしまス。俗俥小寝撫も狂いうそ痕のつく
やうふていぶうません。然ー世界のお訪元も沫よ奇蘇
でぶうまス。初ろ元いあがスまして。女のよと知つまやア出
ひません。まるこハ腕まで白ーい肌い涼やうあり。隆まり好男
とまるこまスうう。押云惹毋さ多ゲ内証で。ひ書房とおさいませ
う。併此方ごこの作家雑でハ行のろもでぶうませんハ〳〵「三〳〵
左様ぐもありませんのサ。まこ更ろ〳〵その様よ。考ひうるゲ

大きいうゝ。併モウ彼見のるいい。音倣ハ歴も様ハ本ハ。一切且
相任せぎョ。結ク構いぎそとすると。面倒ぞ音倣ハ絡サ「支
でも方拾い思ひます。ハく他とのハ樹ハ行拾おきハん。実
ふこうやゝ他の者ぎこの恵ふやゝ。なげます。隠わどい結う
ぎこうハん「方拾サ他ク貴ラアあつぶ。モウ二歩も引て恵
「そもぢやア端よハ取次。世ニもハ義ぎぐうます。ア他ハ
ハ案ずるとぎ。ぎこと思つて負ます「方拾ラエ支ハう正
月掛ハ取くく恵うるへ。方拾ると十ハ歩ぐる「イ

方拾でぐうます人ト笑てハ慢ハ恵ゝ。逆へ。松ハ和と遅て
来るゝ。麻ハ処笠朕ハうます。「モウ先刻のハハ他ます
「八エ結絡でぐハます人ハ。十二他ハ寄ハうハ
ハ拾ハ。ハの掛よ方ハハ。ハ切て負ます「義ハ負
てハこぐうて。ハ拾ハて支ぎ笠ハる。先刻の前絵と
朱ハ「八エハ序ぐハ上ます。呼ぎぐハます。ハハ
「アハの掛よ笠ハ。代ハ三ハぎハて恵ハエ「八エハでも恵ぐ
ます人「支ハハハ。ハ拾でハハ。方拾ハて人ハ。

とまて。お慳を恐るゝゆゑ。清八も是をさとりて世間を憚でも
妾の身へハとまで。わざとまでの心乱本妻お慳が云種も憑しう
らずと心で縁を折りしが。慳い櫛の代紙に墨で淡ひ
ふぞ。頓きて是を改め。請取去てこそ帰る

第二回

世を東陽の春の晨。千里同風のどかの郷もつれて振の
河蓮勝て。此月の空ハうらゝくゝ。今日ハ鹿とうち昇る程
客の気色の結番さ。東方来りし者扇ひ師る女

連衆をまをし上ますと。丁稚が持し塗盃より。口に擬ひ
む扇子の飾或ひハ寸切丸木紙目貝抜着貝抜子揚
枝置みずれ。紅白の。縦りに二三把束ねしありて。ここを足てに
身の祝ひ禮着ハ慶積の辞心草羽織着て挽への亢まる
を喫まにて。往もならうあなきものの八衛に。夕ごまきうけて振の
に飲所の年始帰りて今の手ゑや。社杯猶て小紋の羽織着
拝ニ手の紋付で。そのまゝ着てる二筋や三筋七残ハ返し
て只一個撰ぐ鬱に浮くて「イヤおめでたうお懸さん。今日ハ

大きめ〻〻ふすこと。また百姓も揉敷があごつて。何指も男
敷しゐ中ノ間。又でもあるの門ノ中。従来の男が指りくと。知れ人
のが縁よりあごを指してそうゑへ清云が。何指ノ間〻〻和尚やアえ
れ〻中〻且那さまよりの様姫でござへます。今日八百年始で
ございます。者の長も四〻〻所を。どつて来やうと出るみはてゞ。ちご
ねつて来りません。大こと今まねつてますせう。アあやう指げます。ナ
ようく〻後いこ〻ぐ〻。ようく〻清云。何れやアあ人〻〻〻〻行でア。
やう〻〻ようあう。痛〻〻屋人ヨ。方指を生〻〻〻ますせう。

係お聴さん様ひあさんゐ。今日ハモウ又兵衛で。大きふやうて来さ
う〻〻。辭一疋でも含れれ人〻〻主でもまア長年ハ始りてゞ武
ざいます〻〻。慈と。者様でもあげますせう。イヤモウ食ゐ敷
けゞ。主ようく〻おゐと対身で。弟〻を。するのが何より四地者アア
こゑ二廿ちく人居んお。トキニ坊ハ何処へ往さエ。何ぞ。年ゐト
見人けゑゞど。男ゆやアから長人。どうやアア少様人が行でも長
さうお物と。哭て来て。お長お。せ人ト二歩金二ッと紙ゐ様
ゑ。お聴ゐ演せゞ。ゑ処ゐおき。こゑい有様うでございます人が

此振袖は法山裁きまして。者の若よ所〳〵是まで。お花よ何ぞ
下さいますもの〳〵。羊羹うか腰張の。合巾もも頂きませうと
仰かんせばうちこそ〳〵。何でこまが法山あのあう何もまこ法
山ふ此〳〵まるとよ撞蒲い杖差まこ悪いとかりふあう。
こを言で居ふせんナ。何のあふ見こをう。一何指いこて人
きふ物を頂いて言云で居るとヤすいでぶいませんまこ法
らこ風邪半こ弟も析角方指〳〵めもと言よいこ〳〵ちこ
私も欲ませんう〳〵。見いまアお仕色ちて。自い小さいの

でも一ツ在二ツ半ちすつて下さいまし。一何のつまし〳〵彼
見いまそびと。アア取て垂ふとつふの小波う強いト云ふ〳〵
その金とろて。変理ふお眠が懐へ。お入まるとして乳首の
垂りと。ちよいと捻まび花孫て。アレ風邪さふ撫ぶ門
こ。何でもとまいまアお仕家指ませ。何と法作ても頂ま
ませんト少〳〵こ面目ふあるとえて。〳〵困るふアこ更ふ
何でこん縛つて。笑て就まやうこ仕ませう。不断稽〳〵
ふなろて。ちよこまと頂ま〳〵。何指も乳が欲ません

うゝ。ホンニお止あすのて下さるまし。ヨウ〳〵歩いてゝやせうぞ。
とれと言つゝ。情合ゐでもなれと云ふとう。大造な忍
まてこの方様云ちやア可咲けまどトいふうけて口をとえま
いゝ。あつゝ目色が情合ゐ成て居うやア。今ハ万丈万丈丈
家義地面命でも。是ゐゝ云ひ出ゐ来ゐ。気ゞ実ハ清
ゐい作りあヨ。一本くいつでもゝく。よく人をお笑要なさう私
の世ゐかあと。清八なまびて今日が日まで。女房ゐ
て居て長まゝ。ゐで迷い出ゐ計線い出来ゐ書曲へゝ

ます。ホンニ淋敷ゐ役ゐゝゝどがこの廣い世ゐるゐ。表個と
いあゝまゝまゝ。丈を考ゐ者ゐ何のかのと。江作お気ゐ知れ
ませんトゝ折ト女ハ背中ゐ痛ゐる。お花を遠て外より
ゆゐ。一モウ日ゐ暮ゐゝゝ。ゆゐゝゝとゐて。居ゐ
と江作ゐゝ。考えゐゝくと殺して居ゐゝ。恵お藤て表
まひまゝゝ。方様ゐ丈ゐゝゐ人城ゝ。悲して行燈を
出ゝて。お枕元ゐ。ホイ。あゐゐ神き方へ。丈が居ゐれ人と云
とゐ行ゐ丈ゐゝ今ゐ居倚がなげやう。ハ且那も何様

ばごろ。遠へへ行きかいとおそぐがトおれを捕ようとすれば。ふ
義七傳八を延へ搦まり。おれの藤頼を取れとて。へ実る
モウ実見ごヨ。何でもこりゃア義郎が。一個で骨を折て搦
へてくりして。ゑよそれらまさ寫ご。今ハ知見答りまたくこと
ら。世間ぐさで。濃くしらしらっ。芋見ごトおれが藤頼よも
ゲ郎を押付たぐっ。お照ゲ偽をちまと仇る。お照ハ嘆や
とやへども。下女のよ主人も何と申ッ。色まーけ見バ聞ふ義
七をとえてるのと。所も動くみバふ義七ハ。まんざっ心ふ

しも。おくぎろ容ッとよ茶宮魂さ人も有頼天かくる折ろう
表のくこ。おくぐくと人殺ふ。研ま人見バ廻さ入へ。ゲ郎界
居て轎夫ゲ「モシ〳〵波様ぞ」お出あさのまー。その旦那ゲ色病
で。潮〳〵お速中まーこトゲまりお照ハ師天ー。その後ニ入紙
出ーへおおハ何処の樓やさんざエ。宮脇の宅ハ横屋とふ。
小弓物屋ごろ。ろ遠ひ赤ハ久「夫ろ〳〵ろ遠ひ」ぜんや
せん。早く戸とお開お出。先初ちとハ切ちぐって。叫ってか
在ゑ出人中ぐ。稼ふ敬ぐ。稼ふ気遠へごト笑てお照ち

抱こ児子を抱てみだりに寒処へおきて戸をひきて守るが増る
の中。色まろぶあて腐く倍八「ナニサまア何揺ものぞ。気候
寒うさにおもちやさんハヨ、妻子をうけて実情さんと。すまとて彼
方に力なく死人の如くあるにまかせ。女のかずられ猶かまそ。
持業晩くるその所へ。この始終見て奥の間より駆出る与
蔵七作天し与「何揺しく大変ぞナ。ぞまアおれも手
伝ふと。やうく娘を寒出し席を設て奥へ寝せ容
子を見ても夜へいかまで。医師に見せるが肝心。下女を

走らせ近所ある医者を招きて容体を見するに是れハ
寒さに気を中て。その人の平生酒をするぞ暴に出て出さ病ひ
この業をこゑつけて。飲ませ置かバ別きもつえとり。早く使つかま
来よる薬飲せずにけまべ。ゆゑく乳がつれに顔を眼く見えて
「アヽ語至に若しうて宅へ来さの吟もしう移て「ヤか
お気がお附きう香術ハまア何揺せうと。いまでに狗が惕く
して渾身の髪へが見まはしあい。今ハ何揺ぞおれをぐエ「行
どう空でからおへが。主く　モウ窮うしくらう。手を指に素ド

殿が宜しう支でもアニ素盛の旦那が。丁度来て居あすろ
で。ほ作って下さろう。諸さ吾衛も知らうまいこツレ
に知さ入ッ来ろう。おろもお稽をおきに入れろやア
宜うさナア。旦那さ平四郎さきに「イヤモウ稽が筋斗つ。
来ろ支でも乳が対きやアモウきろのうい有る人の心も業
と精出しで。陝せ小やア社殿人ぜ「ハイなりがうごぶらまん
ト少しく安堵ハするあ。如何あるんと業ド狗。先刻ち
武七が常載ふも。この廓先で拍りうと男がう来る殿人

ろ。ろうとどんべ延喜の通さと。少しのるさ人乳よかろ。傍
ア離る殿看病ほ。心の徐実あるうろ「さくこうやア花
ごろうこ。アアくこのうちじゃア乳遣へな居ん。まと墨の朝
まやく来るゴ。若まと魚ふちろぶあるう。手渡ふ
本を紙ーふせエ。病ちろで。も生る名い殿人ぜ。行ろ宅
の結女ど。ほ作ひふ紙さろ「ハイ有ぐうごぶらまんぶ。まア
拍ろ行の結う被拍り。世話も可成る生乳生ろう。若
まうとグ掛ろまるう。行ろ卒お新ひ中まんぶ後の通

よしち
吉義七の
きもの
お
聽を
ぬ
吉義七

おそめ
おくま

平雅さのいたり。病人がございまして。実ホ佳方がございませんト目を注まして。うち続く。その額ざせまさに傳へきく。唐土の揚州紙が墨の痛むことを悩ましる。夏への新もまさに更よ。笑くさいそ墨痛の景と慣へく今も画の描く。開い唐土のむりの結院。お照ホ浮るや雪見てやと。何よつけても京義七がどなたなりて十分ホ。どひ筋でも人の漢字紙。まづ拾方いたりけるとども。千稲を逢ふも意の欲。更よりう毎日よを寄よ来りまさ病人の除合人。養殺黄

涼干苦ホよ頻仏を唐くして朝晩祷り。伝実又さてまべ法八ちつ。さ憑毋ーく只管。拝むおろうの仏地いすまと。渾嵩の心照いこう久て。そ伝実の様ーさホも惜く若方の出素やせん。義理ホ迫べ後くホべつ。ちるとホうあん。ととるまさ人若号の稜ーさ。妻き心もたくもでして。日毎ホ看病良人の疾ひも一日快けまべ一日へ。ちく。膳は乃もたやるて。春の中旬の年祭り。三尊ホ勝それくよ。人の苦況ホ繋けまど。服ホ厨ホ病人の一間ーて切ま著く

と。主賓の心を揚しけり

作者はもとこの本は。僅一冊にして年の数。七八年の間

のうち。既に松の葉が誕生せり。この書は七冊なり。その

こころ。心ゑ世間人情の文中更も分解なれど。お見る方

いと見ふまとて

春色淀迺曙初編巻之中

東都　松亭金水編次

第三回

一年二百六十日。昼夜をかくの睦なれど。夏は炎暑

小蓮くそ。殤居の納涼も寒暖の敷きと。徐きえ

ゆくこゝろ。秋は殊さら暑き後と。寒ふ光ぐち仏地さ

へ。清くしくの美人ども。その美貌は滋味と。代々のかる

も涼おる。日没ちる時の陽を。鄙もこ

そのあと。まつの間をぬけ出て。室。茅ぶき木の葉さん。
きこ流るゝ水と鏡ぶるまで。そのあたりゝ松の雪こぼで
その紅色と雲るまでゆく。あゝ。春き塩人てゝ人鮮し農
の中頼の枯草ふ。花ゝいさみけと見もまこ迫まろ月のあど
ぎろり。こで慢火と友ゝゝく。一間は竜ゝも身のあゝど。こで
春のこゝぞ日も深ゝゝふ。柳い緑紅の花の迫ゝくその頃ゝ。
人の心も深ゝと約美美嘯ゝぶゝゝと。歩行が保歩と古
人もつゝゝ。かゝる時美ふ外へも出で。且夢公既しく。病人看

病棲屋のゝ。ゝ熙い鬢揚化粧も世ん。顔ふ如ゝゝまゝ郷
の。系ゝと思い乳ま鬢で。かきあげあゝ長人ふむゝひ
「今的い行指でゝぶいまん。世るの容ゝのぢやアモウゝゝ
快ゝらゝゝ。ゝ玉者さゝも行郷ゝぶ。まゝ何ゝゝ二ゝ日い遊
房りゝ。ゝゝゝゝで。涙ゝ園ゝゝゝめゝれゝ。ゝの沈いモウ遊
為の美も。深ゝ咲ゝゝ。毎日大遣人ゝ者ゝんゝ。美ふ
美屋もこの春い。ゝ軒ゝゝゝ大変りで。ゝゝいゝゝゝゝ
ゝゝ。顔ゝゝゝの美ふふも。稼ゝふ観場の。新角ゝ出来

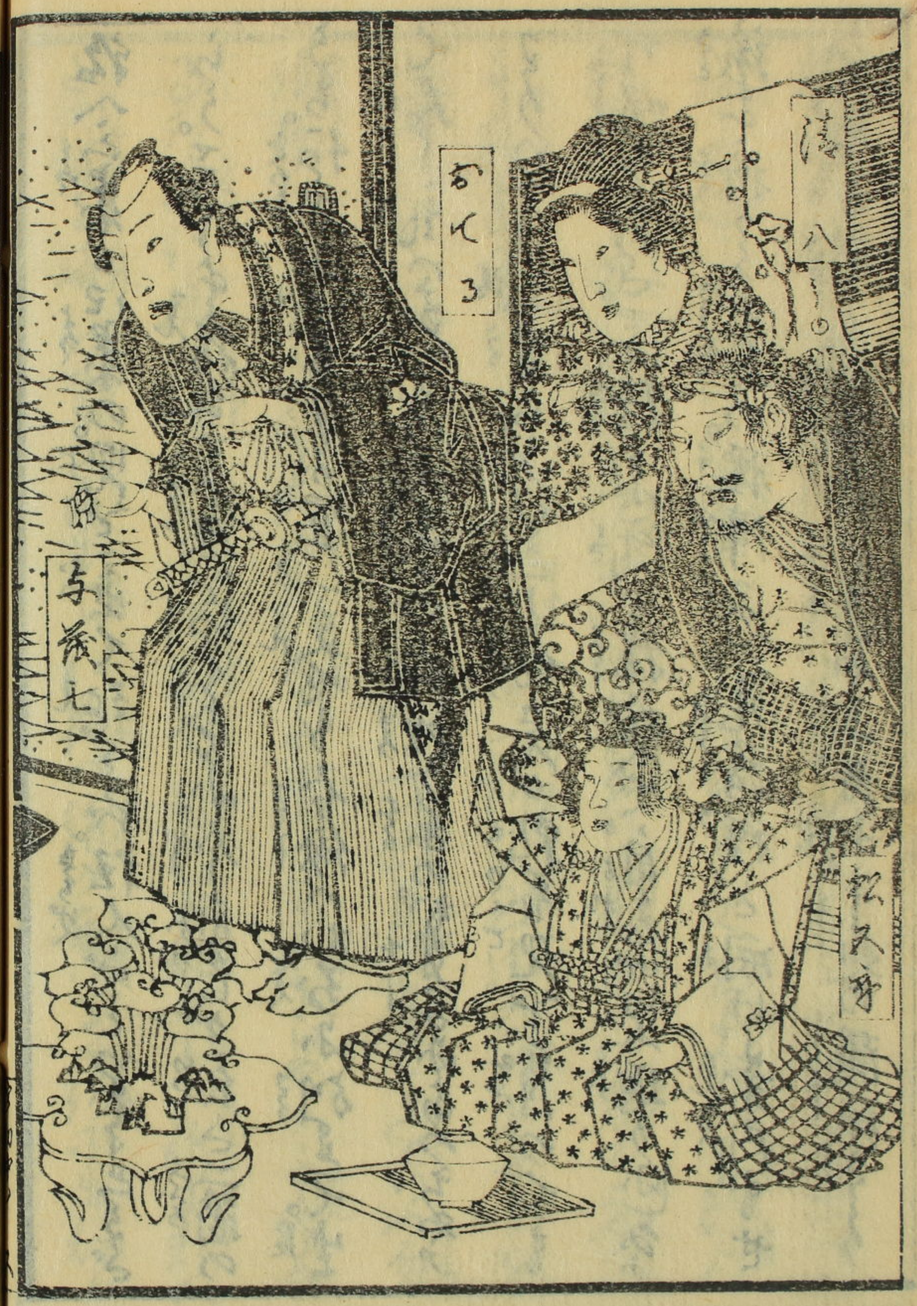
さうの人。何卒早く快かりで。坊を連てふうと。出
さうべ。何程かうでぞいませう。自己もよく快さう後
と。言い葉も我儘にて。服も旅ふけ食ふと。言ふが。何ぞ
もはへ入ると。僅十程が百程か。二百程か。穿てやうで。勿体
ない人が。強情でも。食やうで。喉へいる。何程も此家の
ぢやア。快さうとも。さう人。コウか。廻方程ッと。まこと
延命が。恐いものぞと。一家ひい。消さが。恐ろしさに。
新いまく。初人。赤坊共人。死ぬぢやア。人。自己も。今年い

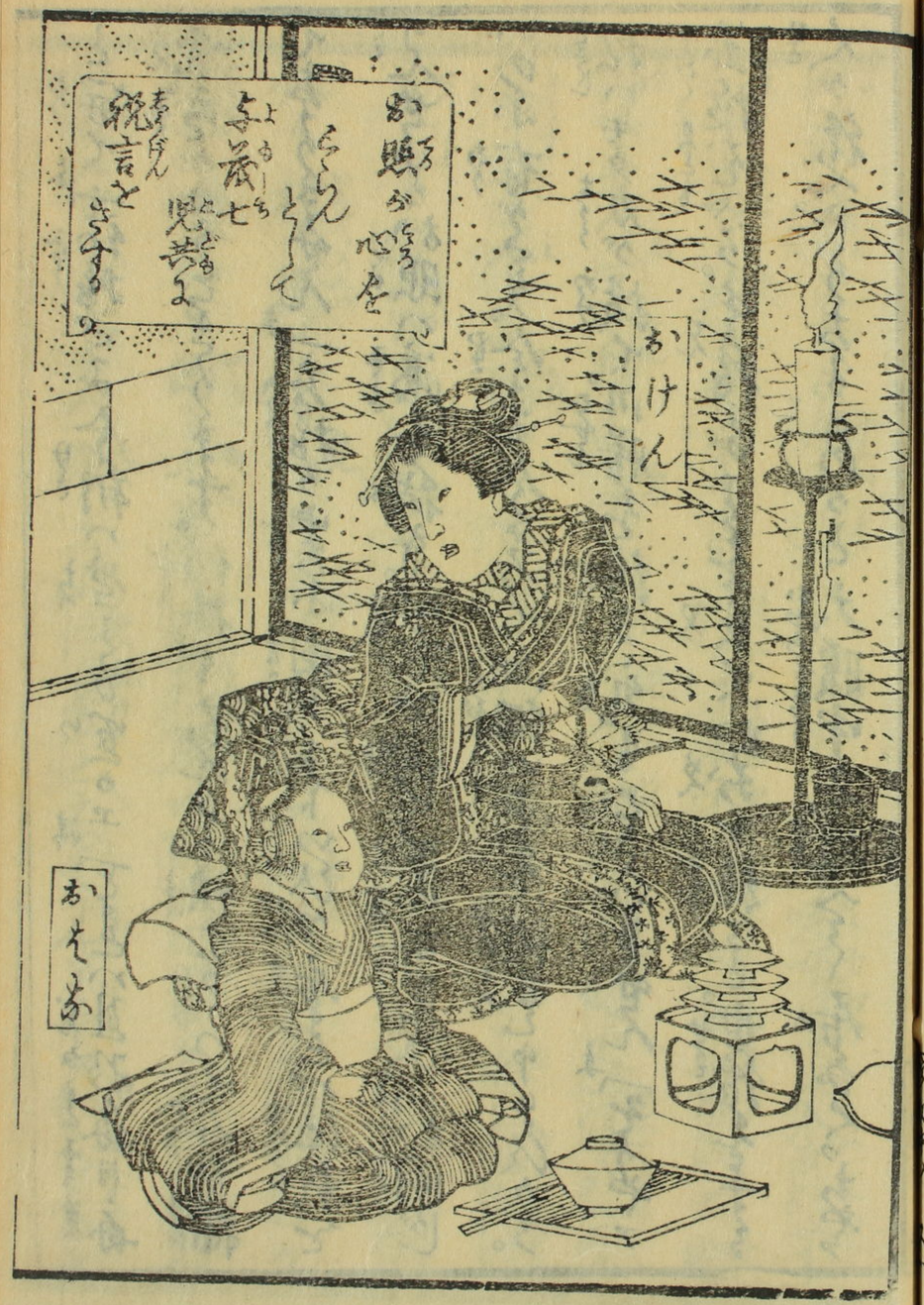
二十九で。七歳九況。さう人。強ぐ。何程も年刻むづこい。
百一まさうこの病気が。快さう。初人。も。知と初人が。恐ろ
が。まさうこの。親兄弟も。初人。まう。心細くも。必ず人けもと。人ま
いまさ。鬼もあり。何然の。程でも。この児ともふ。世話をせう
と。人が。まさうそまふ。命と。任せ。行年。死と。人まふ。
自分。あげて。異ふ。世。恐まさと。程。人。まうア。まう。知
つまる十。時村の。叔父。母も。知。母も。伝切の。まうと。死
の。表。個が。見人。捜つて。居ても。さう。知の。田舎で。気の。毒も

京にも沢山人家満今まもなく新しく出来る人が自己の老父等が
登りの為か人の往来いと多くのあるもモシ御暇でもあるか
く成て蘭華の土地の住居が出来ざア。当下郡へ引越う
と。二百姓ばかり人金で。田地を買て叔父さんが。入れ代わる
更たりよ。誰も郡へ住もせぬ。つまり小田地へ叔父さんが。
御つて住と取て居る。更と二間や二間居食ふくつ
て仕細いなりざ。もう郡を出て内も。そもと売て弟
ぶ。イヤモウ十日の年。つる物みて泥つて居るあとたんが
売籍が入りとうて。取返さうとやアたまらぬ遠ひ障り
嫌しくもあるあと。苦しゆうと。井つりも。出れ入りけとと
叔父さんも更が復小あるえんぐ。書が出来るあの小屋が出
来るこの春年暮の降雪を二俵でも送うて紙し馬の序の
あるは月やア草や大根胡蔓菊牛蒡つまり沢山の振
ぶ。是るのハそのはサ。まもも手延と復小拵て。種やア変
して禅に言ふく。是も関つて暁ふやア。彦振して乳楽は
是ひが宜ト遠ざ出めれる長崎頂。お願いことと生命

緒津の樓で湯を貰ひ「行ぐ」と移ふことを申した。
湯と悲しくおつて来ました。千移みてを言うか。見ぬ
の縫でも取て。飯を炊こい。お緒もこの一おつの身ぬ。
千移ふてがつかつ。ア吾儕も一所は。公遠の川とやうを
渉つてまんと。芝て清八抗と撞て「イヤハヤ果てとつの勿
論頑丸ちの子も。大黄い子ぐ。今どやア移み
子い流り移へ候おちが伝実で。同色が死ぐ一所又丸ぬ
さが。湯と婚いやうこけどど。おれい雑が育るエ。ぬふも新

紙へ二茶ゥ呂茶の。見と盗て死ぐべ。柱人ごとつまるぐ
らうう。アく千移ゥ子藤をつまぐふ。今自色が云と二箇の
ちちぬ。行方ふでもすぐ宜「支でも吾微いおふ刎まて生
て屋ゥ乳ぬおいすめ。支おくべ松ぐ長の。おゥ子ふあゥちやア
ゥりいうよへ「宜ちうけまど坊さんが乳春児を。育つくも
可惜ふあぐ。モ移ゥふ乳を揉移へで。自色がつゥ通り回ゥ
流を折ゥ裏ぬの。障子ゥを尾張程と開け。茶門もせ
ぐ見まるちく。入来ゥ二茶やゥ子義七。千廻の隔紙ゥ


清八
おくま
与義七
松次郎


お熙が心をらくんとして
与義七
熙ぎよ
秘言をさすす
おけん
おたま

と言て「伺ぢる今朝い些こも豆ち工「とと」ハ且ハ毎日、毎
晩。あるごろうごろうます。伺ハもあんぞう快ちくつて。気が揉
てちうます。「左ハう実ハ困るノウトいひや居ましバ注教を
うんせどお聴い濡を拭き。出方ど向て莞爾笑ひ「お用じ
いのハ有ごろう。今も今ろうて心細いことを彼見中ましうう。
私いモウ力が抜て。出膳を給ろ気もどがいません「そりやア
ゆ抱むぐら。手ハ振ふ工ことを云て。おあが弱ると。世話をする
人が居ぬ。どうちるあらと大腹中ハ。揉へく居ぬくっちやア

世話人せ。どうぞ世話ハして。城しと。朝の味噌汁ハ入れろう
「ハイ直ち給ちせます」ハ。嘉示が服も。一日ちやア給
ぬます。「手ハ振ふちやア何分世話人。も処で清八さん
容みをうろふ。何ぞ気病の出ぬ。伺ハうして気の
ちうち。ハが「ちうと。そハけ目ど伺ハ。なーサ。容
ハも種く考へろ。伺と箇ハ。ちやア伺ハ。どうう。自己ど
児花の場も。漸く七業サ。ハ。ハ房ハ取て。出業ちやど世話
ハ長工ゆうぞ。まバ俗ハハ結果と。ちて。ちやアあ方と。

自己夫婦ハ相舅門志。変ゝて他人と。ふぢやァ孫へろう。伝
指よ方ち入ま。やうとも。世ゐで。何ともこの人方。除ゝ家他も
大きゝ義て。夫婦よりやァ親の子。大切ふすゝ業然ゼメバ
なぶ方夫個ふぐう。親兄弟も孫へと。ゆゝ。シテゝんりやァ便り
ハ少ね人。自己ぐやうま。放蕩ゆと。親類の縁を組ふァ中ぐ
らゐァ去ゝ孫へが。百見ハ死んでも例ま。ね人ふァ。御ぐ法山
で助けうゝぐと。嗜人ふもいゝ。ふ色り。不断ハいゝ孫へゆうゐゐ。
まゝの時ふやァ親類縁者も。ふゝ。ちやァ嫌ぶ欠る。勿論

此方も一人見でァ跡取といゝのごけまど。快方ゝ精出ー
て。迷と名入ま。仕ぶむぐ宜サ。ハゝ。別懇ハ除て。方指ちやァ
ぐうぐらう。なぶ方の子張ハ生れ人けまど。お懇ふも。お濃ー
ゝゝそりやァ宜らう。何卒ふやゝ。お極ふせ人と。張も。ふ乳
ふゝゝて。孫ゝ。孫うとふゝ方指ふせエト底の気ハ。ふ
ども。ふぐ。孫ふる。伝実ふ。夫個ハふゝぐ。涙と流し。四所内
ふやァ。孫ふて。ふ。深ハ。ふ別深と。ゝでもふゝよ。方指ふ作て
下さるゝ。何指ゝ神の四利ま。有ぐゝて。四接投よ。業然

をいてまもパウお照ごりしてこりのぐ〳〵お指サそりやア吾微ど
めの外ふそうちやア上も赤。儀障でございますが隣まり赤
不約合提灯ふ洪繕とかよくく人のいふ聲へごけまど。走より
もまごご大遠ひ何ごろアノ坊さんを。婚ごといふのも悼り多く
勿体ないやうふ思ひます。イヤとまいりてりお照さんそうやア
隣まり鼻下がること。たと人家義へ右も右も。おおも町人者
倫も町人行もこまが名家ごろ家の流まごやアあるる人ー。
行ふも左指ごと紙い初人。モシそ指おこまり他よ。指岡の移

こまるこ。今日い良ふ吉慶ごろ。慮は貝ごく指やせる。左
指ごまるば病人の。乳も。ごて少しの薬ごろ。サといへば行
の食備まこ出来ごやふ限取ごトいふふ此方も今ふ
憑ごふ少ちる拵ふまこ。辞退いまこど一段の。贈かを渡る
心地ごて。結指ふとやまごそ。ふ義七い強ごり。出入の仕出し
ふ分対て料理を急ぎ拵の弟ふも。上下長せて連て来
る。お照も異事ふ驚化粧。ふ乳を連て湯ふ往中。去年祝
ひの時ふ祝。婚後の習ふ右ごふ。神ふ。ぬ。身の初ごえ

ごとくに有る事を聞くべ親元清八も打ちうち快気ゆゑ又ふ
けるかくて与義七の指揮して雅楽夫婦を左右に並へ三
九獣の盃さを松乃平太清八夫婦まさ彦より与義七
夫婦。麻とさ人も呼よりて。各冷酒の盃とて。そなへより肴物
弥穀口取判形丼鳥。酒ゑ引まへ本膳ふて現ゆも大人
の婚礼ふ少しも滞りなく式をあり。その夜あの刻ふ人食
をすみしとさんざめいと婚礼りくゑ祝ひける
作者つくく与義七が形のごとくふ計人と。表向ち何処

すぐも。その児の名とつひこえて。その内ふい清八が。病人八全
快ちとゑりくゑ世ふ有き人とあること後。悪ごとゑ彦へ引
とりて。思ひど時さん下ふ平竟その如くなるや。
後の様下と看て知ることを

第四回

現ゆや妻ひ及びまりくゑ。福ひとゑ汁ごの喩へまづ後ふ右
も有も。清八夫婦へ女児の出世と。歓びあり人その名もちく。
病人次第ふ快ふの後ふ与義七も。指ふ倍て

国学の才達の人さへ人然しかき。い
ぬとも申しぐされど。実業ふやゆ泳生の系統よりうちく発け
ば。ひつて称くいお照のと。月じ石ふと注卿ふと上て半死さは
京物と。与義七始め人くが。言葉ふて渇して。ひ慰め生者
必滅会者定離の。世の慢うさ人細くといて笑して涕ふ。
称迦の遠りも果して。跡叮嚀の弔彷らひも。まづ八九分ハ
与義七が。計らひ中て形のごく。佛の祀者も晨くけ上べか。
照ハ百の美心彼しと人のまいるべ。元来親類縁者の区。

浄き称きの方中でハ何をぶうする涕ぶふ者まで。人ふも
笑つと不称合のとき人多くむべきと。身よりうけて今称
まで。ここ五年その信切ハ何といを間の石清水。ちぐまして
湯の浅のるふもつと姉しぐぞ。ぶふ。候ぬ日数も今日と
ことなと。月して三十六日。託つて人海て後。月毎ふ来法
与義七が。ふふお照ハ文と。えて形と刻を改さて「縁よ
今回ハ者の方法。称ハ何ちゃ。さう。まるよ地獄で
佛しく。このるぐ。ぐふ。支よ称ハ取金うく。七月よの

仏様の入用。大分でございませうが。金子の方のお立替。
何卒御勘弁願ひます。何卒申訳宜敷御願ひて。かえせちすく下
さいまし。銀今家財を活て有ります。お返しゆさやさえ
。人も心ゲ涙ぬまいト半もつくまで。こまきく。行の事
さとやつさ。ぱまく行人ゑを又。然しく手をとりそう。そ
れを聖ちいゑへ止ことサ。新しく家の親類も門拍子高
くえりゆア。銀今行方で扶ゲ付ちう。徒ゲ付ちうゲ拍子ゑ
ゆゆア撞つ行人。そ処でゆか聖さん。モウ段ゝ日柄もこゝべ。

せ今までの拍子。鬱を張て。商ひをさとも付まで。愛ち
ゑで掛ゑとも。子自己ゲ宅へ来ゆせ。勿論もちろん落く
へ。初つての夏ちの女房で長ち〳〵一ツ不居ちゝ。ゑゆも辞ぜ
ちゝし自己も辞ぜ。そ処でこの河岸ゑちう。ゑ拍で自け
つゆア地内をこりへ。ちよろ〳〵ちゝ宅を拵へて。ゆゆの一人も
使つゝ。元楽ゑ夏ちすゲ宅ちゆゆア。ゆ元房ハ初ゲ彩婦。
自己の方へ〳〵丸てゆ。ま〳〵傍へ変ちうア。行拍でも構ハ
行人。ゆひもその積りで。地内を出てゲ家立裏不下度ア夏

光ゲカラヨ世ニ引籠ケ生ど芝居へ。ろと一時でそて群
ご。行ッあ〜彼処と捨ても。出。去拾すやア実う〜遠ゆ門
誠と紀合ゲナ。あの何ッ〜今〜〜。自己と一所ホ住て
うん私人。モウ私おつやア夫婦も月お連ごろて歩行こう
て。何処うも風い素れ人。〜〜ろうご行う工「何〜〜行まで お
ふ人生結よ有ご〜〜どぶいすず。ま生捨て私ハ世ニお縋ひ
ごぶいナ人「ハア孤ひとア伝拾ゆ。行ちうともあの
ゆと。老ゑあよ去拾云ナ「そそ生ぢやア恨へく下さゆま

せう「恨へうもく。先ア中もて。ハ命でも。二ハ〜〜拾人
あのゆ〜〜ゆ情ま拾人と。ハ伝のゆとゆ「ナニモ拾ふ
ゆちやアごぶいませんが。去拾中〜〜中〜〜弟のお乳ま陸う
うも考ま生せんが「乳ま陸〜〜ハ何拾ゆ。ハく軍
〜〜云て〜〜拾人「ナニモ外でもごぶいません。私の牙のよ。乳
ハモウ生〜〜弟の方へ上ま〜〜〜〜世人ハ百事生〜〜弟のお心任
せ。独やうホ。も教ハ中し。私ハ今〜〜。松ゲ居のお牙ゆまよ拾て。
〜〜去と夫親婚。清ハゲ善提をも吊らひ度ごぶいまん

うゝ。好事そのことを思ひ知なすもの。こゝに死ゞ沙汰とい。お新ひ
やうゝぐらへまんと結て恨り心組。尾籠理と遣つて頻悔り
一ぱい酒を注ぎ乱れ出るとイヤ怪うゝ私お茶中ぐ。今の美
さ小性個ぶ。手拭の奴があらうめ。そりゃ自ら不思議
ごノアよく物を稼つてえんかせエ。今さゝ重言つてゝ私ども。
知まさるゆゞ自ら思いかまよ。物でもまて物ぬいてもこの
お事をのたらのも知りゝ時よ依ちゃア事我行まよ見流
てもかまも可まで。アア丈ちりゆ月日のうとち。彩ちろてゝりゆア

りゆ傍ゆりゆ人。見うゝ美い女自髪まで。楽まうとい入り
濃ぐうゝ。身よりうけて世話もして。お茶屋まで新婦ゆて。
かゆも安心まうゆ。まゝ自己の伝実も十分ふ入れ世て
亜のふ丈でも実濃ゆまゝ私人。ゆを云て乳を揉せる始末
彩して毎日毎晩。入ゝ浸つちゃア屋ゝけまゝどゆも。ゆ人
のゝに十九日もゆゞ。海苔人よ知ゞ人のおもなると怪へゝ
居ゝゞ。かゆゞして十四や十八の。彩造児ぢゃアなゝ人。
怪ふゆい新亜振でも。承知して居ゝゞゝ。そまよ何ゞ

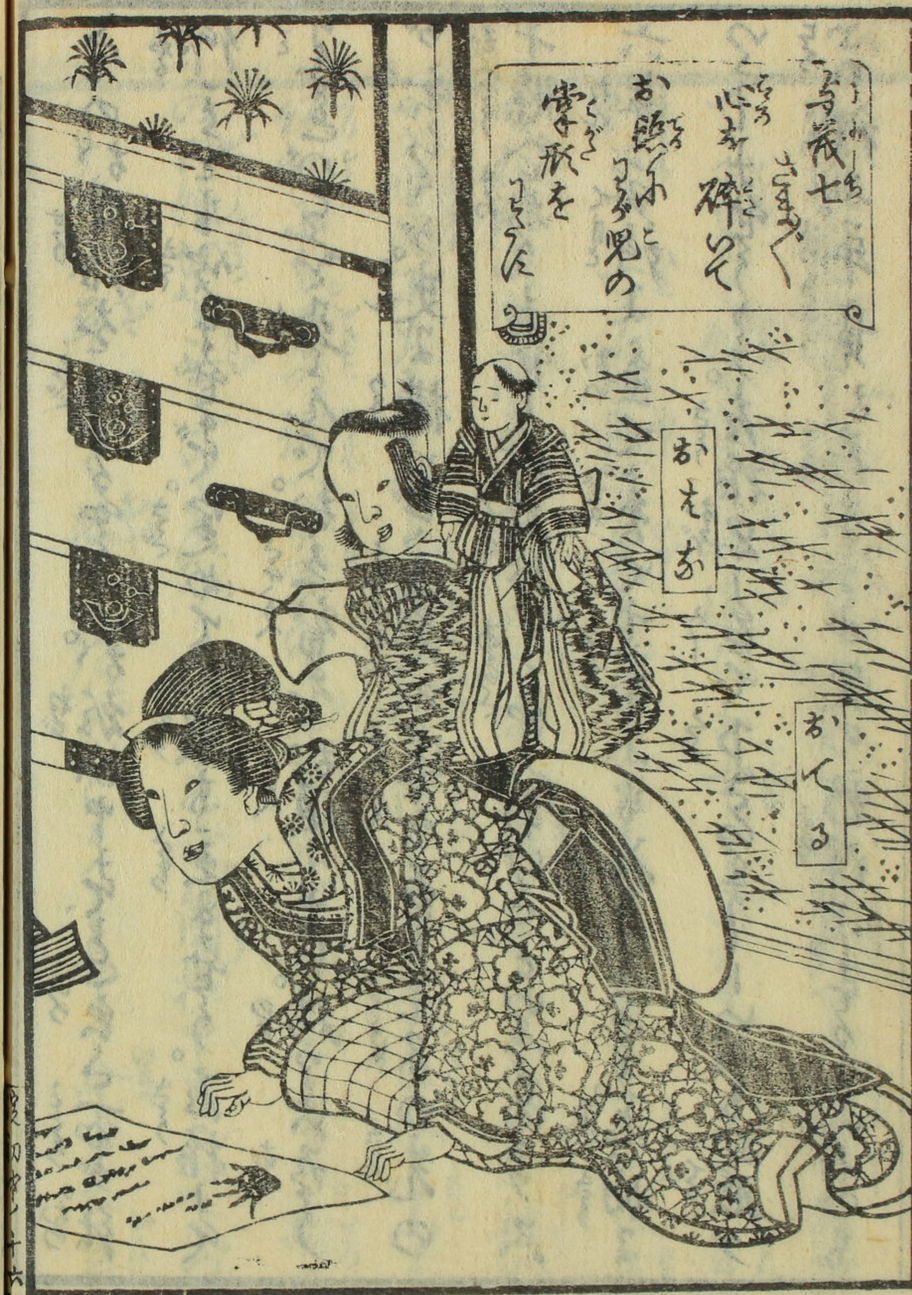
ばらふかるゝ。沈丘たふかるのと遠方も及ぶ。そこを徳見を
が縛かのつまとお懐厨が被又奴で面倒ごと思のつ。モシ
吉右衛門ゝ被奴をば。こ汐半と申うて。おかを乗るお
関宝さんと捨てもを生地いわ。行方知りとおかの様ふ。
海中ふ志やうつふト延門さ弁ぬ与義七が。云多ふよを
知と変装して。長時俯き居うしが。お照い結と心とす条
て「敵ゝ良人が居ゝ。被見と江作ゝ。移ろ
てこそ見逃とつ。ゝ一ゝ変ないお世話と下さるのぐを

あるまいう。美右衛門ゝ体方の復と翻弄てお乳の毒ゝ。
ゝこゝゝ見ひまゝゝ。居変つて行処へ相法ゝこゝゝ
人もゝ。ゝ弁ふぢゝゝ押ゝけて。親類ゝもおぶぬ
お世話ふ。ゝりまゝこの四郎ハ死でも高ゝいゝまを
んが。その母ぢゝいふ与義七ゝ。行年法ゝてゝ色ヨ。
紀中ゝ阪訴弁ま。注ゝ西でもゝてゝとまゝお疑ゝ
さゝゝゝぬが変て吉右衛門ゝ訴でいゝの。ゝハ清八が死
まゝゝ。一訴ま死でと不断ゝ。見捨ゝて居まゝゝ。

左指して人をとまぐ粥く。臣栄児のも死をば。雑世話と
て、お見と伸を。ろ法遠ひお如ざと。いをとて人をとば生る
むぞまと一ッ小ハ面も東も。ろく左のあをと不便ゲ場
て。死ぬふも死をまぐ形して。居ますけまど心裡ぐの。
モッ世間ふ左のあと。ろひ切て神くさまう人。義人ハ家より
後初ふも。男の側へ寄まのと。拾云文と去ます。ろう。折角
の出仕切ど。云ふいろ人やうざけまど。間抜中をのぐおざ
いまん。行卒悪くろ一ぶ。ろらうとろう今まで色り。

ぐのお世話をトさるやうふ。お祝ひ中をとこ云ぐ。弘
仰ろをも伝年せぐ。定めてお腹も立ませう。左指して
りんをばろを寄んで。ろ之智をお返ー中し。殊ろ人ろう
が云ろう。実ま構ひぐ良人の。遠云色り王子の先の
十條へ寄りませう。お死い寄へおげさといふあ。モウ又
六年ふ年ま垂て。夫て十歳ふも。ぐまりろう上口切ま
いろりませろう。左指ろ一ぶて下さろまりトいふもお照ゲ
心の裡ふ。年竟お死をこぐ児の新婦ふ。ろるといふのも

与茂七


与茂七
心を砕いて
お慈しみと
愛児の
学成を
おもあ
おくる

世界を以て自由に世界を対較して楽しう。性来遠の幼稚円志後くのと異ふいまくび殊よりの身がつのとを可称べいよく彼然の碁。傍よりおく小黒と色とちの心を推しそや。与義七い莞示して「左指る義稚おい貞女ご。その心根を笑びきくるど。移く慕りくおりの けとど。神さ女八拙云文ーちやア。恵よ破るとつふも徒世。文ちくくおハ十條へかり。み條へたり徒ぐつサ保ち死ハ彼色り。ゴ彼ふがくも盞まで。三流ふさーさんどくく。

自己が万へ引れて大事まうひて世活を仕やう。ちあハ文ても素ぐるぐらうが文ーて藤来ふやア高移人ち。月ふ二三回ほみ回でも。海ちどけよ来て容ちみとえ分世工。自己も漢士ご学ハ仕移人。去拙拙くくく奏居の札でも義へ張ぐ直「ハイ早く去拙くくまちう保ちへ且移い乳屋ハマア妻ふでも私の。情へき変ぐぐのまん。移中ちやア可嘆ぐ。ふんぐ者ち弟ぐ去拙法作ても。もスさんもまぐ泳く七業。大きく死て彼ハ稚ごと。ちあさくくち文も去ちとび。実ち空

寂〻とやう。究こぶ極こともあるまじきまでの天
遠ひ。史ぢおア蒸がるる屏ふかる。手形よういまを殺蒸
ちぶ〻ふの紙ぢおア左振ろ人も宗理い孫人ろう。行の指ふと
ぐわらうとも。変しを手変の孫人証拠ふ。松屋ろうと丹ふと
ぎ〻トその変をいの自分ふ出れ松ふ弁ぶ裳へ。墨でべう
ろう史へ押せ。その明日拾て来てやろひもいまぐ拾中ふ意
の欲ろいろ〻ろう

春色淀の曙 初編巻之中終

東都 松亭金水編次

第五回

史よ〻後も二ふや与歳七。日毎ろ来アて遊ろう。
戒と紙のごく拳動て。酒の砂きへ人が聞ふさ手て。拾ろう入れば
いはゝろ。除き拾りの亲勢ふ。いぐろ丁と囂〻ト。いひろる
いせ間の恨ひ。堅いく〻と目来ようふ女の鏡と塵見ろ。さ道
さるか照も独身と。ろろていの心淋〻ふ。かの与歳七ろの

心易き楽なき人もしる女好の男なりや。清八が大癖で。
居る所へかうして出来るであらう。左様でなけりやア三ヶ
月以来のお花を女房の縁者のと。引合せ後へ家を継せて
縁を組のも可笑な理屈。そりやアまア日来から嫉妬気
の気地悪な二葉やの女房が。おれくといふなりに次第な
って居るのも異なもの。此頃彼処の亭主人がらよの噂きやア
お内室さんとアノ伴の腰八と。情合よかつたる遠へ
後へ旦那へ内証不居で。何様かすると座中の役。腰八が

察くと。勇人出かけるであらう。殊よよくく大様が。今は
出来ちでいろやせうと思ふとあの女ござる。頭で辛千
里の世の喩へど。不様居が芝居も長く続く商議きまする
ぞ。日数へしもちで此家の二十日あまりのあきなかりし。歳七
路あり男さ年でよあれる。枕も並べまで。今亭さんも
あるぜれバ。お腰お麻を始めとし。家内の男女も談込で子
息子は番頭と逃へ。推るも当惑ハすまいぞ。唯日病の弱は
あるなり。其の助者もなえぜれバ。這ハ一通りの異な中では

ゐ〳〵ぎくべと函者と換へ。容体又すこの病人。中毒を
どのゑ悔きくなくまで。酒とゑゐ又稀と破り。内核の症を
まべまづ全快い見来ゑし。殊よ墨さの烈し紀折く。大
切なりゑ使ゑゐ。お喉ゑさめゑゐ石ゑ容ゑ妄の於
麻い狗つぶまく。疾の服も麻ぎゐ病人の看ゑ病心を
せぎその平癒ゑゑゑで。洗界ゐ肉脱ゑの人。紀居ゑ自
中ゐ大ゑゑで。せく憑ゑゑ紀狩ゑる。お喉いなる日の
英賢ゑ。掾頬へ蒲と裟。疾食の没けと夕河岸の蓉

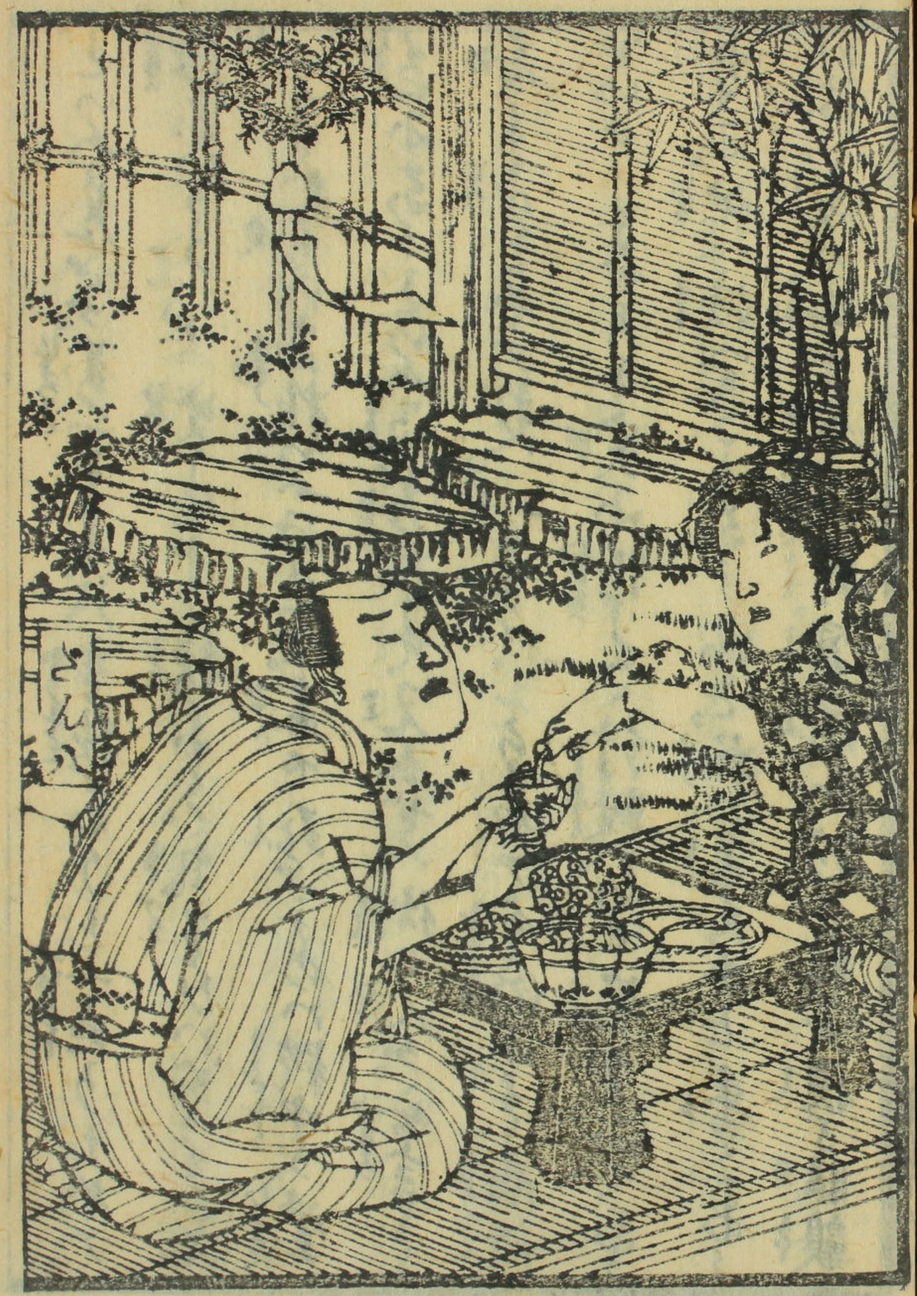
法脱鋼の贄つの。手他伝中ゑ蓋薬。こゑ紀ゑゑべて
隙見の。猪ゑを手ゑ也ゐ号彼の。小ゑ敬をき也。ゑゑ
ゑ弼ゐ右ゑ折ゑ。徐〳〵と来る。性紀紀八人目のなまこ
べをゑ〳〵でゐて紀。モウ紀猪でござりまんゥ。イヤゑの人い
めつまゑと。異きが強く出ゑ。丈ゑ紀ても具ゑき多
い。閑ゑさんでござのまんれゑ。只今もお麻どのゐ承知と
べ今朝ゑゑ。服湯も一向ゐ。ゑめゑゑ。この墨ゑゐ左指ゑ
るのちゃァ。手渡ゐ湯ゑ也ゑ。一左指サゑゑ〳〵ぶゑゑゐ酒

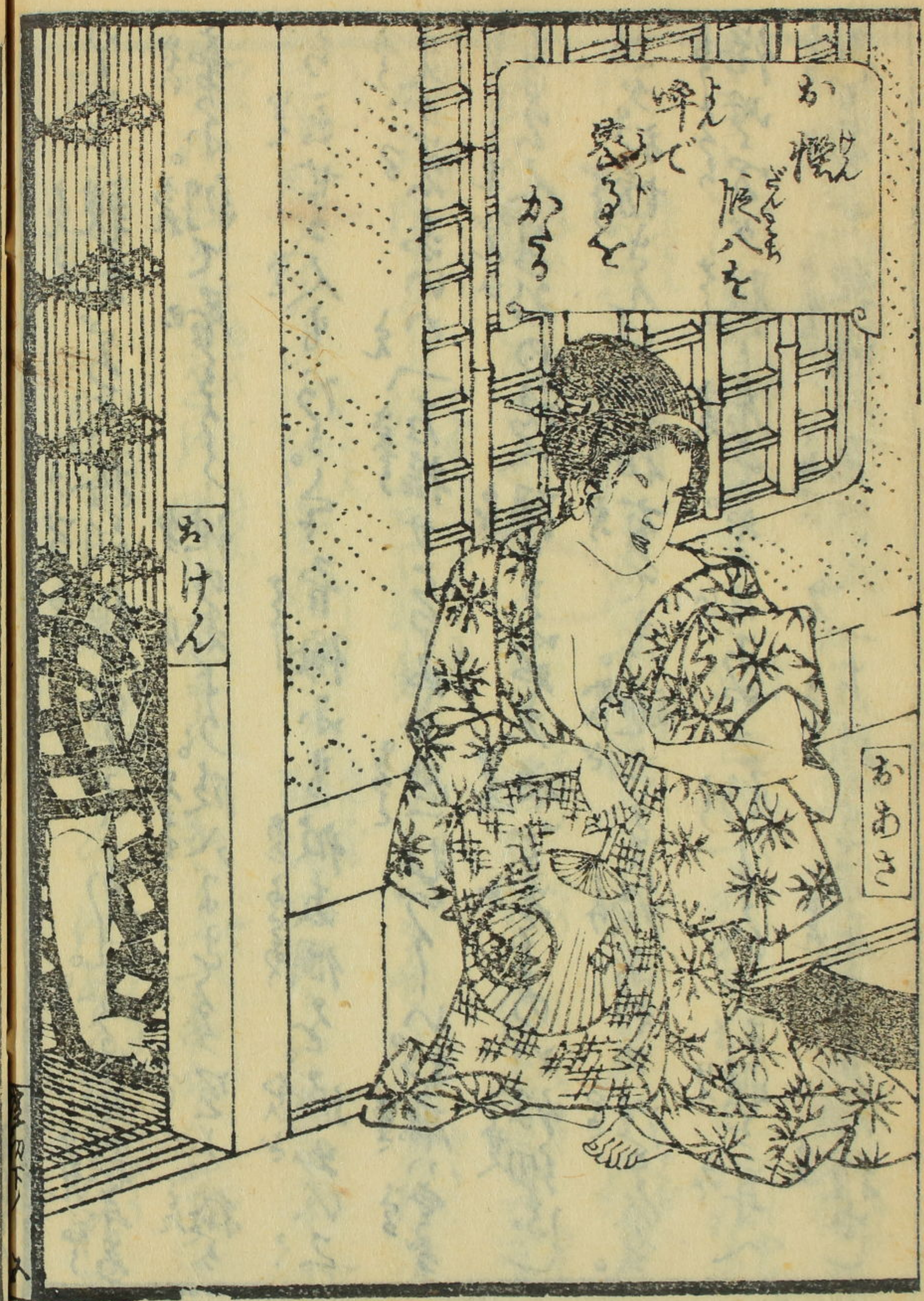
もちつこ。お郭まさん。つくけ豆ど。更も可ぜ。かとこいやア間
ぐ。おいつ。鶏かもたるのサ。彩服人を見ふ。花て。宮藤も稀
ちき。こ乳が揺る。サア。ち人。来る。彩ぐ。ケ。コレサ。宮八。彼方へ
注て居や。俳諧さん。と。商様。して。宮。孫人。ちゃア。あ。ゑ。う
ト。おを。逐や。ひ。く。服八を。迫く。抱き。一ア。一ア。ち。ょ。り。ョ。。の
鶏ハ。ん。ご。宜い。一ア。大ぶ。彩ら。ー。さ。ま。一ト。キ。ニ。服八。具抱
の。頭。乳。い。ぐ。せ。快。ち。ら。ち。ち。ゃ。ア。孫人。と。。宮。藤。い。ん。究め
ま。ま。一。昨日。も。。親。顔。ど。来。さ。ら。れ。ふ。。更。ま。ま。し。ま。注。を。み

て。見。彩。改人。ハ。ち。ち。と。居。る。。積。り。ぢ。ゃ。ア。あ。ま。け。豆。ど。。彩。雅
く。ッ。て。も。松。房。ま。ち。人。男。の。児。ど。あ。ま。ん。ん。ぐ。ま。ま。。。何。の。か。の。と。面
例。サ。ち。ま。ま。ぐ。湖。ま。ま。七。果。児。。何。の。殺。ま。も。ま。ア。孫人。。紙。合
彩。智。ま。し。ま。て。も。。後。見。ど。ち。く。ち。ゃ。ア。ち。ま。ま。ぐ。。ぐ。の。通。ち
い。ま。ち。の。物。ョ。。ち。ら。ち。ゃ。ア。吾。俳。ど。行。拓。ま。も。。青。ち。行。て。ち。拓
ま。ま。ど。。ま。ち。ち。の。旦。拓。ま。花。て。。拓。拓。ま。表。婆。ど。ち。の。ま。ま。。
孫。ち。ち。ゃ。ち。孫。ち。孫人。ョ。。空。腰。ち。孫。の。藤。味。ま。ま。し。ど。入。り
ち。ち。吾。俳。と。可。ち。ど。ち。て。。見。ち。ま。ま。ま。ま。ま。風。ど。け。豆。ど。行。拓。も

指繰へ乳と繰種と。今ハ蚕ら生る。コウ阪八信と
ゴヨトいひさま繰のもうと乳もべ〳〵ディタ〳〵むどへか仕重。
行でおう指を又指るめうぞ指をしるもやア罰ぐわ
くんて。蔓う肩見ホちうまきア。猫か婆さんの家留い蚕
文。赤指ちゝ浸又へ四親新でちさへせう〳〵指ちゝ
うも知ちへが。所を蚕飼ガ確法のサトいひあゞ小
蚕ハ行あう。ぼ蚕成映目又ちすり〳〵あゞう〳〵まらうあゞう
阪八ア。牧ちべお麻ともホ。逐出して仕出度ヨ。赤指す

つもやア親新ごろて。捨引親しの人ちあり。人ちまで数年ち
蚕ホ。別て居ちゝ他の家ちう。阪八ハまちゝ至と。猫う
ちこ世ち人もなる。で蚕飼ホも牧去個を。逐出人工
夏ガ見ホいい〳〵赤指サこちやア歴むゞい。お麻ハちゞ
ちゝ人。鳥羽の家人限ちホやア。晩を考ちのい仕細ホ
ごゞ。お坊さんい行指育ても。逐出ちて沢みやア洗手人金。
猫世方ガ腹を居て。ある日ホやア彩ちまんトお晩ゞ耳へ
ちもどちの世。私語べ点沢て〳〵赤指さアち夏ちもべ。指色


そんい


おけん
おけん
ぢんぢん
辰八を
呼で
寝るとを
かろ
あまさ

といふまんじゅう。第一をまこ成半殺まうと。一遍うちやア
滅ふいろ〳〵十二変して。やう接まうこ。気半ひいなりません
一イヤ。ちいさい表指いふけまと。毒を殺ごめい鞠中ゞ。紫
色ふあるといふるゆ。表指しそうえ世人。例の人ゞ。金ニ〳〵
あるものもやア殺〳〵まつく。そらもやア手腐ふよく。廣域
をいつ〳〵半ばうト実ふ悔ずき。計較いを。塞ゆふて。ま
ちふ。他へ減べきこゝろ〳〵。私と。物へ。えゝふと。番こあ
い陸。病の物ゞ。病ゞ。茂待。冥府ふなり。私と。猥ら眼鏡

鼻。皇天さ女の四行〳〵ひ。お麻い。先ゞ。義七ゞ。鼾吸
眠ふ心ゆ。彦屋。隣り。異ふふ。去れ。抜き。ほの人
ふ。ふ。ふ。ゞと。お。擬ゞふ。金の涙の方。ふ。ふ。吸。今。風
ふ。汗を。納と。ふ。けゞ。鞠中ゞ。紫色。あゞい。あ。
とお。擬ゞ。低言。耳。ふ。ふ。ゞと。毒涙。ふ。ふ。然。ふ。
腹八と。情合。ふ。ふ。極ても。和ふ。今大。病の。ふ。義七
と。毒害。ふ。ふ。ゆ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。

悔うゝまで。支婦とあつて樂まんと。ちろゝ新しひあしと
か見べ。身の毛も逆立ちやゝ不安えん。若えつゝて都て惡
しと。軍ゝ肌を入れ。被布へゆけばこの内に。日へ金ゝ軍新
ゆて。帽子持て来る。歩おゝ。一ちぐへゝ段八へ。彼方の方へ
立てゆ。折ゝ乳を脇ひ。ぶゝ提灯を吹滅しゆが
らゝ。題へ例の裏口ゝ。ずつと色つて。「まゝ内家さん八今
四時でございまんゝ。実りとよりまし。私へ多度四病
人をトひちゝ。此方ちる。ち義七ゞ病ちるへゆけばお蔵へ

えて笑ひ。「まゝ。お出あらこと。涙ゝ異いぢや
どざいませんゝ。「お指ゝ今日八風もあり。此指ぢやゝ。
れませんゝ。支でもおゝ例でもゝ。お情とちるまでお
世話をちる。味ゝ感ぢでどざいます。体今日八河指ゝ
四谷ゝ。ちゝ四時でもあゝまゝ。「モウ一向いけません
のゝ支ぢゝ。彼ゝ居てもこれがひけるゆゝでありません。方
指ぢでどざいまんゝ困ゝえどちる。お医者さゝ多八ち例の
「ハイ被ち方ぢでどざいまんが。行ち他の上ゝおゝ医者ゝ。

損てゐるしも存じませんがト云かけて小指を出し噂に
なつて「こ是が此世ともお挨拶申しまする。誠よ私も仕損く」
て「それもやアまさ行方ござりまする「行かたなさ若入でもあ
りまするまいヨトいひながら烟草をつけてお照に「且那
さまハお照さまが。お見世でござりますヨト云て与蔵七眼と明
て「アよくお出何指も往役人。モウこま是が、お若様ござりますヨ
「外でもなくお指ハ。気の弱いようぞッうり。我慢してお仮
でも。ちと世へあつて四境なさい。この患さに絶食ぢやア息才
な老でも弱りますさア「自己も死ぬるア婦人でござりまする行卒と
なつハが悩ハわんトいふ折から極の夜食を往まひ。宴へ来て湖
云ふから「まづ行くれど。お手から将お照さんの御威光ハ
違ふまい。答倹ども当日小数回行指ぶ人と喰ふろてそりやア
眼もあきさやア若ふさうし役人。平素それざりし世指に痛ひ
で。跡へも先へも往役人ので。先須も抑技ろイヤ交法ざうけ
。後し戦しでなる人が。後家といふと別段に。寛しくなる
といふ。その役人が左様ろノウ。自己が嬉しも後家にし

てゝ笑ふと。大笑ひとなるわけ。なるほど後家さま
いてのあとより百段も揺殺ぐようなる。今体お照さんへ評判
の美くしい女。後家小右衛門。百段もとりこまる男ぐるい
ぬのも云理アれど。そこ〳〵死奴奥様。ほん〳〵ふい理屈ト
恍まで眠嫌ひ〳〵れて。ろ沒心の穏なる。お照も勤然と意
ふて。もれを脊より侍よ命し。お幡ゞ教をえ猪ろう

第六回

蔵下お幡へせゝら笑ひ。まやお照さん居ゝいと。夢こうぐ乳

おい〳〵ふいのろ。大を怖へ教をかしごま。〳〵行も手指ょ膳
ゝとゝとゝとゝ。ちやアふいう。ろ遠ゝこゝろもこゝへ
「四大病のお方の侍で。溺〳〵〳〵波乳と。やさへ心高ゝ
でゝ乳の毒でゞぶいまて。手指ふてゝと法御まてゝ。どう
ま。ゝ言てゝ居〳〵ません。今お幡さんの四月後ぶ〳〵私
と性命がなること。ろーゝてゝでゞぶいませう。「知てゝろ毎
日無嫌ゝ。ろの侍で離と沒丸で。居〳〵ゝゝやアゝ性でゝ乳のサ
「まゞぶ〳〵やさあやア。あ〳〵乳のでゞぶいまて。飯今毎日毛

門あふ。来ておとなすると。串戦と一ツ仕とるもの。勿論
且ばかり酒のみでも。お辞あさると串戦を。社仲ともあるもの。
丈ひその座ざうの奥見もまぐふ世話よあり。殊よ殊来へ行
拳あろう。知を知へなろうかれまで。四伝切よ出すてやさる。お
お拳へ勝しても。手拳ゑ義理ゑ出来せうう。他へ行
拳ごろ先〳〵ふいご。見でもく人の皮を剥つく居る。私でぐい
ままを。狗猫ぢやゃごぐへません。彩しを鼠咬四寄ゑと。
中ふ来るのも。他ゑ〳〵四君よおつとゑ人べとを然もな

けるやゃ。狗ふと人来まん。あうまを狗ふもこを度と
が。稼〳〵汚ふあるまんけまど。訴給行を云さって。横車を
押さ上ちやゃ。怖いおいろ中もせん。サア坊モウ泣ら〳〵。大さ
切して四人家ふ。来るのもその訳と。来〳〵ら上ちやゃ迷惑
ぐ。モウ見ろ〳〵来るせんろう。本実ごの物識ごぐのと。悪く云
て。も来ゑんかトいい持ゑ上とか懸い捕いく「まやまゃきのい
猪ゑサ。これ限来ゑいとむゑのい。そろやゃ。おあの四猪ゑ次
光。坊宮も腕ゑ〳〵ッて百ゲ。横車ニゃ行のるゑ上。各衛

しやア竟にお前方に迷惑さしたるも尤じ。自己の良人が
朝から晩まで。遊入に出て居ッてそまこにも接まで。だう楽
ありて気を紛らさるゝやら。気揚って方々がなさいサア撲束の
縁を啖らうト見に角立て夜付たり。諸方まで遊ハ何のことか。お
花ハ欲しと泣出して。お麻ハ二個が中に入て「是ハまアりお夜
個ども。お孫ともござりませうがとの御病人の枕元で彼是が
あまてハ持のこと。お障りにありませう。アヽ今日ハこれ限でサア
お暇さんも最りあさへトいふをとある座の言ばに。殺情ながら

児を引抱へ眼もあまで立つきまべ。お煙ハ例の一條揺煙田
来不隠る綱子「是非この内に白ひ星ひ。宛もて立
込ちやアおふと絡へぞ。古推も以て居らが更ト出る出世線
振むいて「行ぐお麻利く風にも帰まをぞと揖揮をして
二宜掛波ござア版でも合て来いとうハ自己がまなでするうち
「モウ何播ハ絵ましたよ。壊まア堂像ふ所で御体息を
いまト風よ柳のお麻が金をまとへといふやうしもあらけり。新て
二三日経るわざに。与義七ハつよく疲まて眠るがごとく世を去

ぬ。親族の親きとつゝもつかも。お幾い人へ世の空涙。お麻へ
手ゝ分けでなり。れば弟さん岬へ。行相ふるとて案じて
い花かもなりまぬ悲しきか。眼をさん泣腫して。その赤心
を見てゝ。かゝとべその初せふより。祝歌縁者その他月
来心易く。社来とるあ金集まりて。形のごく社を送り。
万事移りて。行ひて。日数立まふ松み弟へ。幼稚けれども
男の児あり。つゝと初まゝ親督人。お麻へ実の母あれど。
亦のとふて与義七が。なすまゝ。行べ右も右も。今形まいて

うゝ時い楽もまゝ年差あり。こゝふかくべき人あゝ松べ。紙金
として社遊のゝ歩をとらせ。脱を老り。松み弟へ七年まゝ。
お幾が世結しゝ月べと。相商後物りし容ゝ。お麻へゆゝと
の身のとゝまゝより。新ゝ所あゝべ。更ゝて仏細あゝれど。先ゝ
繁盛しゝべゝること。且まゝ不孔ゝ。つゝゝ教して。亦ゝべ
うの必事のあらゝも初ゝべ。法行相しゝと。行ゝ不孔ゝ者ー
てゝる松へ。法新して。法来ゝ。松み弟へ。お麻ゞ猫へ。とゝ云て新と
なゞ一人今義母さん。親ゝ孔ゝを母ゝ。お麻へ。ゞゝ云ゝ。ゝゝ。お麻

この頃よ。服を考へて居るあの居もの。今までと違つて
大人〳〵仕方やうが違つて。たゞ指ひかと怖い目をして。お
前ごろごろやア坊ゝ義子でも大人〳〵すりまどの。おつと一
所ゝ居るのゞ豆。行れへも行ちやアおらゞゴトいゝ教ゞゝとお麻
へうえやうちまで潤む験の者と。そし拭てうち長沢一寸と云
てもさうこと。君御も行時まで坊さんの傍ゝ居ゝ度
ぐけまと。老爺さんゞ佛さんゝ。おさんおすつて指もつ
ぞ。お服ゞ出て又まゝ。宅へ帰ゝふやアありません。義母さんの

紅作ゞ。モウ見うゝハつやくゝ。大人〳〵おさの通ョ。
私も宅へ帰つてこそ。ちよく〳〵と来まして。その時ゝ
おのゝ。お新やゝ。腰沢を指て来まし。安沢て宜
おるゞゝ「更ゝ麻美物を指て。毎日〳〵来ておれョ
「乗りまんとも〳〵。ちよい。山月ハ風を指て来ル。然しアノ
箱入の大きゝ。天指ゝ。「去指ゝ。沢ゝ。
〳〵ゝ。ト。ゝ。利殺ゝ。ゝ。
ぞ。さらちらゞゝ。今更ゝ。右方ゝ。居ゝ人ゝ。

う後世の日みて紀念会二十年。いとく眠ることもなりけるに。
ひ儲けしことなれば。殺生の業七年以来。猟と雑業の報
見て。彼を怨み恨む悲しき。行ふ祈願方もなく。身の筋骨
も接ぎ心地なく。弱て果てぬ。此外なりつるべき方なく
ら私が法華経。下ちしが。お麻が宿い見より西南。家門所
とて訴ふ。文い表と来しと。塗師と業を。無いを名妹
をば。養ひて十三位。養ひ来ふ。養ひ来ふ。養ひ来ふ。養ひ来ふ
ふ。養ひ人を孫ぬ。利を含ることはせず。妻のお為も良人ふ

きれば。この年来お見の。お麻。二男ふ屋の踏と泣て。男児と生人
養ひけるほど。彼を一回ふ義七を。心合わせ。張て。ふ
義七も拝い心を。て。変ときの。助けとも。ふ屋
来史拝い喜びて。お麻を。ふ且初を大事ふ。初め
とで。孫ふ。ふふふ義七が。辞世ぬ。と。文て。悲傷ふ。拝
ふ。ふ大枝の。紀念会。頭ひ。ふ。もも。敬き。残る。松ふ
今少し。成人とるまで。見ふ。て。ふ。て。家業ハ。徳見
孫ふ。て。孫て。佛壇ふ。位牌を。設け。朝夕。茶湯

田舎のおくさま。お麻ばかり糸をまいかく叮嚀に吊らひぬ。彩
一日一景屋の鄙の男と中働きの女と夫婦松の子と換
ゐくに斧頁て。芝更の衣新と丁稚よ斧頁せ。門の戸
開て「お麻さんはお見ふお在なきのまんと麦ゐれて
近所「まゝくお出おそろとよ。行ご坊さえ斧頁ゑ。
猿児さんのゆうぐ松エ「まアお女ョ麦ちがい下ゐゐ毎日毎
喰ふ。殺懐て開ゐゐ。鄙も矣も熱かゐて。稚ゐ編し
ゐゐ。お菓子をあげても抛ゐ出ゐ。自ちいわ麻の所へ往

と更ぢゐゐ云て入ゐ去る。更ぢゐゐ。お内宮さん（おけんのこと。今の後藤家のお嬢さまのこと）
いゐ。ぐモゐゐ開る。波拾ゆ云ゐんぐゐゐマア二三日も心配ゆ泊
ゐ。ふ斧ゐと。更ゐゐ。ゐ斧頁出ゐとのサ「九福でぐゐへま
ゐ。ゐ開ゐんぐゐ。サアお麻の所へお出ト斧中ゐて抱とれば。
松の弟は芝ふして。お麻ぐ抱へ新ゐつける「アレ四歳まえお
坊さんは弾よ現今ぐ。お坊ゐ。一番俄ぐ下ゐとれゐ。ひ
ゆゐて麻知ゐて。お在ぐゐ。行方マア去ぐゐゐ知へ。行不
ゐ二三日は。お泊ゆて此方ゐ。お送り中ゆんとお内宮さんよ。

二葉屋の丁稚
彼の素体
とまた二編の
始めなり
かふち

松又亭

豆〳〵法師でおまをさへョ。こりゃアなんで方丈さまの番方
（ハイ〳〵）お麻さんは拵ようとこの法師でおのが落も。猛出て
拵拵ゐ。猛者〳〵金〳〵いたちゆ帰る（此拵ゐ西へ向ひ歩ゐる
より。お宅のそうゞ廣〳〵そ。然して芋羅で豆のふねエ。猴義
拵この氏中も。番傘ゞ呼をする魚ゐ。お内宅さんといで人ぐゐ
ゐ。児どもの面例ゐこをそ。こんまる人ぢゃアありません。丈ま
ゐ。律氏の。段八ちゃん人と。何でもそ遠ひゐ。それぢゃ
拵のことこの児ゐんぢア形藝ぢアね（コム左拵ゐそりゃア魚

いっさいこんるゐがいろと隈ゐ左ろて。どうも治りの薬ちゐ基ぢ
「丈ぢゐ〳〵」お内宅さんいその段八を呼人歩して。目拵ゐ仕拵と
いこのぢけまど。此児ゐあって丈人りゃア左拵も仕ぢ。心のうちゐ
ぢゃア何卒ちゐ。死拵ゐ豆と。ひぢらうョ（まゐ左拵
でもあるまいが。猛〳〵いのうめと。寄まるぢけゐ仕まゐちゐん。
ちゃ〳〵モウこの拵ゐ帰る。お豆ふしもゃアこいゆうぢぶ。ドう〳〵何で坊
さんか。此乳もでも仕ませうねエトお茂と呼で笑ねさせ。服の
準備ゐとりゐる。妹のお茂い年ゆう弘ど性笑ての子頻悩。

[illegible]しくすまひべ自然。忽地刑部卿。松の弟。花さんくと長櫃へ
び。お花もまるで可愛ごって。多家の後八百屋へ実物を注ぶも連て
出けるびろ海よ熟の多多塩く　見サ手指ホ実物おと
ぞふ。連て出ると傳よるヨ。宅へおゆうの尚波指ふ所へ。
壁のうら海りふ考こ。陣よ汐張げ勇く。おつてとゆきて
も縛ぐこ。乳と多ふヨト誠めても。遣ぬこで実うけ。

春色淀の曙初編巻之下終

宮内庁書陵部